

留学先国名 : アメリカ合衆国

留学先学校名 : Sinclair Community College

留学期間 : 平成 26年 8月 1日 ~ 28年 6月 30日

*留学中の成果及び得たことをどのように生かすか

グローバル化によって、多様な価値観が生まれている中で、多文化・他言語教育の必要性が叫ばれている。2020年に小学校3年生の外国語必修化、小学校5年生の英語教科化の実施も、グローバル化する社会への対応策である。また学校教育では、基本的な知識習得に加え、課題を自力で解決するための思考力である「生きる力」の育成も重要になっている。そのような新しい社会では、教師の指導力に負うところが大きくなっている。私はこれからも日本の大学で教育学を中心に絶えず幅広い知識を構築し、学び続けていきたい。また留学で培った国際的視野を持ち、社会の多様性により生まれた様々な価値観に理解を示していけるような教師を目指したい。

*留学中の生活

私はアメリカの大学にいた約2年、合計23教科を取り、様々な勉強をすることができた。アメリカの大学で全て英語での授業を受けることは大変でもあったが、その分“集中しなければ”という気合が入り、一つ一つの授業にフォーカスすることができた。また学生はみな自分の意見を恥ずかしくならず発言するため、参加型の授業が多くとても楽しかった。

春学期の授業では、教育学、西洋歴史そして成人心理学を取り、一見どれもバラバラの授業でも、すべての授業で私の目指す教育学に通じることを学ぶことができた。西洋歴史では、歴史に影響を与えた人物についてのプレゼンテーションがあり、私は思想家で教育学者でもあったジャン・ジャック・ルソーについて発表した。彼は17世紀にフランスで子どもの教育学に大きな影響をもたらした人物であり、教育学では欠かせない存在である。ただ歴史を教えられる授業ではなく、自分の興味のある人物の歴史について自ら調べ、発表するためとても実りのある授業だった。また成人心理学では、心理学者であるジャン・ピアジェの発達段階説の講義があり、子どもから大人の心理状態の変化などを学ぶことができた。

そして教育学の授業では、初めてアメリカの小学校を見学することができた。小学1年生のクラスを数時間見学したのだが、先生の授業の進め方や授業方法などを見ることができた。一番印象に残っているのが、生徒と先生との距離感である。日本の小学校の先生は、生徒と給食を食べたり、休み時間に一緒に遊んだり、生徒との距離が近いイメージであるが、アメリカの場合は少し異なる。アメリカの先生は勉強を教えるだけの存在で、生徒と昼ご飯を食べるようなことはせず、また日本の小学校では普通に行われるような、給食の準備や掃除、集団行動などの指導も行われない。アメリカでは雇われた別の人が掃除を行い、給食はカフェテリアにて生徒にそれぞれ支給されるため、生徒が給食の準備をする必要はない。

私は日本の小学校の先生に比べ、アメリカの先生は少し冷たい印象に感じた。アメリカでは“教師はクリスマスまでは笑ってはいけない”と言われているほど、生徒に舐められることがないように、生徒と教師の線

引きをしっかりとっている。しかしこれは様々な人種の人々が共存しているアメリカならではの教育であるのではないかと考える。集団行動なども、日本の小学校では当たり前のように行われる教育の一つであるが、多民族国家のアメリカで集団行動を強制するのは困難である。国によって独自の教育がなされていることをこの授業で学ぶことができた。

*これから留学する人へ

私が留学している中で最も感じたことは、自分が日本人でありながら自国のことをあまり分かっていなかった、また分かっていなかったことである。大学で出会った留学生のほとんどが自国に誇りがあり、また相手に自国のことを知ってほしいという情熱があり、愛国心がとても強かったように感じた。それに比べて私は当時日本よりも他国、他文化を知りたいという興味の方が強く、日本をもっと知ってほしいといった愛国心は少なかったように思う。しかしアメリカで、人から「日本は美しいし、人も優しく、素晴らしい国だ。」と言われたことや、ホンダやトヨタなどの大企業、日本のサッカー選手、食べ物などが当たり前のように知られていることがわかり、私が思っていた以上に日本という国は海外に影響をもたらしているのだと感じた。そこから初めて日本人であることに改めて誇りを感じ、愛国心が湧いた。

アメリカに留学したことによって、より日本の外の社会に目を向けることができるようになったと感じる。変動する社会にアンテナを張り、新しい情報を積極的に取り入れることの大切さを学んだ。また留学は、もちろんその国の文化や生活、人間性などを学ぶことができるが、日本という国について改めて多くのことを気づかせてくれる素晴らしい機会でもある。私は友人から日本のことについて質問されて、上手く説明できなくて悔しい思いをしたことが度々あった。きちんと自分でも理解していなかったことを改めて痛感し、日本人としてそれは良くないと感じた。人間関係を築く中で、相手がどのような文化の中で育ってきたか、どんな考えを持っているかはとても重要になってくる。多文化を学ぶことはもちろんであるが、そこで日本のことを改めて学ぼうという心も必要であると強く感じた。